



腰巾着



川崎ゆきお

「ウエストバッグが欲しいんだが、君はどう思う」

「何ですか部長。それは」

「もう僕は部長じゃない。元だ」

「いえいえ、部長は部長。ゴルフ場ではまだ部長ですよ」

「あれはもうニックネームだ」

「それより何です？ ウェストバッグとは」

「知らんのかね。腰に巻く鞆だよ」

「ああ、腰巾着ですなあ」

と、言った瞬間、二人は黙った。

部長は元部下を見る。というより、腰巾着を見た。彼こそ腰巾着なのだ。つまり、この元上司は元部下を腰にずっと付けていたことになる。ただ、進んで付けていたわけではないが。

やや沈黙したのは、腰巾着に腰巾着のことを聞いたからだ。

「何にお使いですか」

「だから、ポケットに入れておるものを、あの袋に入れれば楽ではないかと思ってね。それに、よく見かけるし」

「じゃ、買われたらどうですか」

「そう思うんだがね。腰に巻くあのスタイルが、どうも恥ずかしい」

「確かにスーツには似合いませんし、また、そんなことをしている人もいないでしょうねえ。ただ非常に小さなタイプならベルトに付けている人は見かけます。上着の下に隠れて見えませんし」

「それは僕も知ってるが、あれは小さすぎる」

「じゃ、どれほどの大きさで」

「ほどほどでよい」

「普段着でなら、適当でいいんじゃないですか」

「そう思うんだがね」

「じゃ、決まりですねえ。私が適当なのを見繕ってきましようか」

「そこまでしてもらう必要はない」

「まあ、遠慮なさらず」

「そうか」

「はいはい」

「ところで、もう二人とも退職してるんだ。いつまで君は僕に付きまとうのかね」

「ご迷惑ですか」

「そうじゃないが、何のメリットも、もうないと思うんだがね」

「そうなんです、長年のことなので、つい癖になってしましまして」

元部長は、この腰巾着を見て、ウエストバッグを買うことをやめた。腰に巻くと、取れなくなると思ったからではないが。

了